薰蕕録

門

曾
775
44

曾 775 44

薫蕕錄卷之拾九

目錄

參河物語 上下

薫蕕録巻之七十三

中村直道輯

我老人乃事なれハ多くなりも知れたる事時々唯今
乃時分ハ御主様も御普代の御内乃者の筋ハも
一圓世御存知猶又御普代の家も御普代久し紀
筋目ハも志らはれ三河の者なれハかいえに御普代乃
者とおほしめされたる事其ほとて目当ハも子たち
知る事ハ支なれハ書ぬなり此書物ハくういへ出
そこの事ハ御普代の中諸の筋ハ志りめくり乃
事ハも能きんさくしたく一書ハ是ハ我子たちに我筋目
ハ知れきんをめに書置事なれハ他人の事ハも不書
それによりて門外ふ出と云也各ハも家ハ乃御中

御家にハ三河譜代と申候安祥御譜代山中
御譜代岡崎御譜代是なり安祥御譜代と
申ハ信光親忠長親信忠清康迄に仕候もの申御
譜代なり山中御譜代と申ハ清
康の御十四歳の時切とられ候のひしかたの所に安
祥の城ハ申にも及ず安祥より山中とも申候所
なる故に山中をも御取被成候ゆへ清
康の御代に末ゟ仕候者一門衆ハ国侍ともの方へ
仕候事も有り信忠様あつて家の代を相
ら候ものハ其付より御家三百の譜代のものとなり
成るあつかひと切付て大方一門も出仕をせぬの
そのともも出仕を止もしもせずば一番かまいなし

多くも出仕致候に付候てもあり〳〵出仕をとらせま
じき由御申候ニ付候に次第の返事にて御座候
とかく御詫候ゆへつく婦と御免申し仁
られハ信忠にも我等御扶持を見とゞけ今よ
り御出仕なされそなたちもつまり在の御ハ上る
と申候扶持様御指図さまで一〇下々へ清康へ同じく遣
背申なく〳〵書や分ら被成出仕つかまつり御座候
と申く出仕の方もなき人ハ信忠に扶持被成申候ゆへ
思ても清康へ出仕くる異にも被成すとや和ハ押当
其後ひくるかて御書付きさす候やあらく衆へハ
の所をて被合かゝる人と成申候ハ御墨付にて扶持さず
其御家十三年にて御代初より掟被仰し

清康殿まけよけり是つましとも清康の徳ともにはかりかち
く吉田河え近くめんと清康と内膳あらそひかて能登
守へいそしかハ其中に岡崎侍従新次郎兄弟
四人ハ打捕吉田の城にハ女房とも出して見下地とらう
なりにけりとて見んとしてまいんかりハ吉良して乱の所より見ん
程にも見る清康ハ四の様に合戦に打捕て吉田川の上に
引ハ迎て一川ハ旅越吉田の城へ引せあ入ぬへハ女房たハ
あんかりハ然るもの出て田原へとちて行清康ハ吉田より一
日の御遊覧に旅あそひれハ吉田にハ打ちき所のひと渡りを
所ぞへハ押田原へおしより宿させ給ひて田原も加われ皮
こハ後ハ御らさ給ふ田原に御孫に森将ひて昭南
まハ又吉田へ押のらせ給ひて吉田より十日の御遊覧

の間に山中三方にくてなかをの田み子野田牛久保ある
うきハかり二まつん木いなその家の禮もくかかりけん
にこハ後ハ許させ給ひて出仕にたり昭南もあハ吉
田にも御立ありて安堵へ作らせ給ふにまありしくあ
祥の三河阪とり申すりて諸国よく人のにたるハ清
康の御中すり去るみなや甲斐の国にハ信虎ともも
信合戦ありて信前には入りらしてなかとて一色の
出来と存る程に美濃に入ハ入れや御馬に寄らせて人
御手にかり中をんとり而して尾張の国森山
御手にかり中に美濃へ上る心ありて森山の
とてさ方余めくて安堵ハ打立まして一円の上にかを
時くの持ちへて押せらるもいまかり石橋よりは城を

いてゝ下ハ岩やすく納めなるんに大ゐ城ゑられなるて
清康行なこそ云念なれ三河なく森山ゝ清康とは
ゐの事之
おかの代枝とも竹の代枝十二ゐしく清康におくまさせなゝ
森山なつれく十りもそれさりに小田の深正の忠三河へ
打出大拾年よりたゝ城ゑるゝ時森山まく進服切結んと
申れわき人進服ハ家や若君様ハ城まく清服をこ成
て城に大城かなきを努なへ志かれともまうしに清服
を切結せなふなる各打死を仕ゐるのな結ハて我城へ押
寄く二三の丸へせめいる結ハ其時清服城ゑ成へまたり
内に清服ハ切ら努給ふ屋うらはわまうともハとても
進服城切申上ハ清城城結我うれ世の思ひもよまれ

くと切死に下仕ゐ城にかたりこめ結まく寝かしおまて
死申抱なるハ進服とも申乃ゑ志りまともゆに御
普代と申御慈悲清なきあ清あるれともおりまれ
ゑ場くなて南庭の死ハ仕ゐともかやうに寄子なん
そくをけ死仕ゐるとも何しし清代とわまうともの
代くの御なをけ清慈悲清あるれ結文清康の清
慈悲清なさけ清あるまゝ城思ひなれ寄子なん
そくのて我に只て打敷さま申又ハわまうともけ
死仕なりまかりなてハまり申をれ清代と又ハ清康
の清志ゑ清あるれ清なさあるくハ何に清普代
成ともおの時ハ寄子かこゑく山野にかくれ思ひて
命成清く屋ゐれとも清康の御なをけまハ女子なん

そくもおしうらはさて各若君様見あけ申ひら
きて後とさうくとなかし　各書子ちんそくとに
思てさて申事霧ちり　ほともとしかしそ若君は
法代を持賀申きほして御嚴にも其所を行はそ
しく東西の法供申事ハかなしさまと申あへ
其一度ハまつとさまふ是やこの志ゆくそんの法なり
めつの時十代法てし十六羅漢六十代ハいらるを
かなしこさまふもかくやらんさて又法普代みてなくハ
何者かか様ハかなしまんや是も有りへハ二人のなから
ハ普代の也様ハ志くハなし二者事ハ三者とハ能
し性申侍ふ法家の法遠行の時一度さまひ唯今
若君様ハまつ様二度の内事ひ打死様とけ申さん

とくもりに書子ちんそく還来神にとり法我てさけふ
こと三度のなまれなりたや時別称は御暇申こ
御雅ハとて御前を立く所も家神家家様大事と
思食みや伊賀の江の八幡の名井を時伊田の江の
方へ其日まあまふ各屋様を出道ほとも伊田の江
みく歓迎待けく所をりかたりと云ともさう兵
やうく八百ばかり深正是を見て大拾寺を押めて
二ほけくかゝる伊田の江と申ハ三ハ北なりしハ田
北り郢の方へ四千田の方ハ四千押寄屋様なりもの
所も八百を二ツほ事とく郢の方へ四百田の方へ四百
みくおむふ事ハ見えたりと云ものなれ者とも甲
傳みハ伊賀の八幡の事とりも日羽の矢ハ歓迎かゝへ

とお待申候よし内膳殿も内々にて仰に思ひ出候
なり殿原様へ今さん者は別の事のなり候大久保より
はからひ申まいらせ候文は記請殿書付へとして七まひまゐらせ
と伊賀殿の八幡清水へ広忠殿届候へつかはし申ます
ましく書せ申し新八郎方へ使くまて御郎添て兄弟殿
よりせ兄弟の前にて申しかしこまり候事申まいらせ候
御内より伊賀殿の八幡の清水まで広忠殿届候へは
き申ましく仰せにて七まひ記請殿書せなり候はま
そのおもてをやとかけくとまいらせ兄弟衆へ
文殿本家さ御申さんためにこそ御あつかひ候
これにてお記請殿書にてつゝきくちてつへおつる
是殿かしみ起請のおりく皆申しあけまいらせ文にて

むかしは七まひやくさもひとつにてもかはとかけてなき
申さく思召候はすしとかの殿清水へ清水一通のとかくく
あるかにこそ兄弟より入まいらせつかはしてとかく記請は
千まひもまいらせ候へ広忠殿一度は届候へつかはしまいらせ
よく申まいらせ本郷八郎より起請殿なるとて書きつけ申は
八幡の清水まで七まひ起請殿とはとかく本思召もあり伊賀殿も
書申さんとかく仰候やうに本思召なるもあり候もあり
ても広忠殿聞候へつかはしまいらせのは大久保より候
いとかくまいらせ候ほど一度二度の記請は人々とも
御かけ候はへは文記請殿の前を御と広忠まいらせく伊
賀殿の八幡の清水まで七まひ起請殿大久保殿へつかはし
くたされ新八郎方へ御内の二人の兄弟より殿ひ

二三の丸をかゝめ給ひて いまゝ番のやうに一人もさゝれ
打れ給へと云て 時代あけて 鉄炮ばなりしかけ申せハ
知るも知らぬも 前にしたてゝ 敵もあれとまハ心を清
曹代前ハ何るかゝるおの城を志給ひて也給んとも打得
へて 誰人そ 廣忠ハ門入申しおほへきりて儀なし給ハ
急ぎへしとて 心を前ハ急大手へ乗てこれハ主給し
何りしと名字てさせ集城よりハよきりの名をやく 其
給ふその後 次郎 六郎 様にて 牧曉方にそへ 清和宗ハけ
させ給ふそや 清曹代の面をハ急ぎ二三の丸へいらせ給
ひて 二三の丸をかゝめさせ給へ 此ゝめて 上野より内脇及け
付給へし 清池の有る数と申されハ各家もくとりけ
入て 二三の丸をかゝめられハ内脇及もよせ給ハ内脇及

仰けるハ廣忠ハ門をて申者ハ別の者にハよもあらし
大久保ハ有へし 腹を切すへき物なれとも 伊賀の八幡
の清前にて 七枚起請を 三度書せ申れ池の上にして
全す者ゆゑ 悔く口惜 三会成こうくるひ先にたゝに
まうすひあしへ 物うそ 大久保ハ内脇及にかくよ給ひてもくに
持て 廣忠をさへ 面前させ申 婿ハ内脇のかくこなりしも起
請のうちも いらせ 唯今にそうまし 此と云 廣忠十三の清蔵
清蔵にをくれさせ給ひて やうてさ年 かんせんの大をう
内脇及に岡崎ハ 立ちさまにひて 清蔵十三にて 伊賀の
岡へ 清宰人 成 清家十五の春 浜河の岡に 清下 成 川及を
清根 成 元年の秋 川及 りも かさいハ 成 三河の岡
こうつに移らせ給ひて 清蔵十七の春 清宰店成 岡崎へいら

すてくなる以ゆしてくれよ我ゆしともかせ見以後くて切ひ給くもの
なりしは過分なりしてうひをもまへ唯今は我も成らしける事かん
まんしてくまてよ云く帰て田以後へ仕合後は法前成人
亦少及ひし人源となりしは主なり書事以後へりこれ
一命をなりしんと相りひ給ひ法志ひ以情の法云ひとのとれ
く諸人源となりして一人君に相りひ付中に成かの事をとり
ふく法をひとりも有事法は諸人恨以成して君に相りひ付
一命以をてんと相りふ者は一人もあるましきに廣忠の法志ひ
御情の行云義ふひとつまて是以後少及に廣忠にハ書事以後御見
を一命以なんと申者斗之只人は志ひと情とあるまこと越ハ
なし絶なるに天性孫士郎をめして仕合ハ廣瀬の佐久間
以切て来まし切をましたらハ大須の江にて百貫ありて

てをふまり物なりしハ同所ニ為中貫ありて仕合ハ佐久
間以切らんことおりひもよ雑をなれとも普代の主の御意
遠かたし但法馬のしんにて打死もやまし法前へ引出
さ続く首以うたまや事もやまし絶とも志ありことハ同
前にハあまし佐久間以切給んこと心以無しても成かたし
志ありと申ても普代の主の仕ハそ無う続て成程ハ祝程
ひて成程をハ志をまてとおりひさをめて御詰と申詰立
居るあんまりに別の儀もなし佐久間と切らんにハ先佐久
間所に事ひとて行ひ続ハやりて主にたり志ありしに結
事ひ以まり事二両とまるにしたりに法りまるにハ大方
ならしに氣に入て後にハ膝にちりく法りまて祝間結
あたりに以たひくらひまり仕合ありとおりひて今ハ附合も

坂井左衛門とのハ同く小田の源正忠しん紙合てこれにて廣
忠へなんちうを申うけ打も能ハ城をもかうけ申ふ清城へ
清め入て志さきなん申ハ御書あるハ石川あきのかとし坂井雅
楽助ハ腹切らせ成ちそハ清ふそくを申ふへきと申ハ御書ハ
当人の者ハ何とて腹を切ら打申つきおりひもよしすと仕
ハ所ハ左衛門殿別んにて清城へ清め清ふとて各清城へ来ハ
きハ左衛門殿も引のき清ふ大原左を大衛門ハ殿清次郎なと
もひとつくと成紙ハ本城の門ハ紀にて左を大衛門ハ一人清
さふ着て左衛門とのと打清きく大原左を大衛門もしく殿
侍こらもたれ五三人引のさて源正とのへ有る紙ハ雲平
義人との金井七三郎との清紀玄ハ成ハ御あと清さの
清ふなしと仕ふて主御あと成あふきう仕清ふ志うるなまに

又ゆもと殿清諭申てあふきう成ハ清勇にあてくの
清知行ともまハ三人の清知行をひとつましくあふきう
成ハ廣忠の清紀ハ大つくんにそれなり申やうに
我儀ハ押留成ハ唯そこそ廣忠へ御清知行とハ申せ
とも実りしと押紙仕紙へハ大や廣忠と当天に成清ふや
志うきハおくれ入も古ゆ殿ハ内臨とのにあり有る仕合も
あり後の主清らひ見成先人のくつ人をと見て後ハ
申しめなすとも各諸合して廣忠へ志のよし申上義人殿と
強河へそ川とのへ御先に清うまされそれより置諭によせ申
中さす義人とのハ鶏りせ給ひてあいつに何事そや我
廣忠へ着して御言さきのんをうとうしまかし　菅成
儀にてゆきくれ文く家勇に御目へ申さすなし仕清うまし

申候らんと申て罷後に居ゆるあやうり者こそ一本誌立
よりも千萬んにくらこそ御ことに給ひれハ各前面しくこそ
居ゆりけり相又隆正の忠も引いらせ給へハ廣忠の御
せりハ如常ひ罷書致たく御ひけりハ和田の記いて〳〵思ひて
三大馬を切て乗れ切ころ者ハ百貫下ニ下と給ひれ
御請致申 雅紙思ひて見てあまハ前後も知らず見へ
たまハをしつけく 四編前つ記者りほとに拝もきて候
てそて雅書給ふ罷書も志のひ入きりに勢氣もきれけり
まやそこ紙出ひれハ腰のきくにまハ沖助左衛門も見とつゐ
くこまあらまて 行ひらるゝ兄の腰ひたらるを見くおひて
のき斗り助左衛門とゆハかくれ御きく相同への者かけひ助左衛門
とて人のゆるし 武きり者之兄の罷書ともそつくんまし

ぞり者之助左衛門兄紙ひつけてのくと云ひけりハ法ハ為の記
給ふ知りの内まきまもおくれ給へくまきましきと申され
ひけく家にまたらると云けれハ相之助左衛門ハ能稱きりきり
とてまらひほめまたり かけひ罷書ハ法約束の通 百貫
ニ下ひり相又廣忠ハ四方に為ニ六ヶ記紙と雅を給ひて
一国一城に成ら勢給へハ仁川殿紙御粉ニ成法らせひを
粉ニ入と強河へ法らるしけれハ仁川殿法返るに加勢のこと
やきき儀之但と申に人志ち紙給ひへきれ加勢と申さん
とて給ひれハ御雅いとて給ひれハ竹平代様法六の法時志ち
相として強河に法下向ニ成ゆり志ちる月西の新まて大和に
めされて田原へあふ雅を給ひて田原より強河へ御下向ニ成
へきとの儀之田原の戸田雅せしひつ後ハ廣忠の法らしめ

まハ法名明らかさる竹千代様の御ためにいまむかしのち之御方
やうひ給との小田浄心忠へ永楽千貫文に竹千代様をうり
給ふ竹千代様ハ宮殿をさ給ひて清殿の庭て駿河
の宮へあり殿をお給ひて大宮殿あり給ひてあけの年を
わたしやう々広忠の給ふには方へかしさるしてなきハ何と成
とも浄念寺と有とて後の御用をなりたり浄心の忠もなき
ひもなくあづかるつきる様のあ殿されハおすゝめぬ志ある者そ川
底給ぞりは広忠より志ち抱をさしつかしとてもことより盗
みて敵の方へ下り小年ハ是非なくさ取と小田と一度ハ
おし侍のころとハ見へたりけれハ広忠を見給さて加増あり
つしとてゆんさいは寺のせつさい老に各給ひ殿まで駿
河遠江東三河三ヶ国の人数を催して加勢ありせつさいハ

駿府をたつて藤枝に着ぬ明くれハ藤枝を立て大井川さよの
山を打こへかけ川に陣をとり明くれハ掛川をたつて袋
井見付天龍川を打越て其日ハ引馬に陣取明くれハ
引馬を立出て右手にまけて今切に本城をこへて吉
田に着て陣をとり明くれハ吉田を立出下地小坂井五位
赤坂をうちこへちや山中藤河に陣をとりまもり岡崎まハ
各出陣ありても取ていさや駿河衆のむかふるか見んとて
弓取三十人ばかりえんかう方山へあがりてなかむ此中
打おし岡崎の城よりも荒人数出有あかりて岡崎へ打
迎とあつてまつくろにかけかゝりて坂を押上せめ上る雑人
ちかりの衆見くと見て家康ハ荒人数と見へたりいさや
いふうらに本の衆出張して其節にかくまいりてちらくに駿

くん遠きりとてたゝかくと渓とたゝかはせ給へハ各も御
原理とてよろいの神代ぬらしたり総局深正の忠ハ後
河原の出りと呼てきよすの城とおしこく三日ハかさ寺
成海に陣を取給ひて明られハ柿寺をおし立給ひてあ
祥に悪給ひて三よりやまたれ川の瀬に親て上和田の
ゑてに稱らせ給ひて明られハ馬南の原へ押よせて相
陣をとゝ給んとて上和田城未明に押あて岩河と上和田
との間一里ありしかりに山道のことなれハきらひに
見出さすして御しかりかあ給さ坂へ殺河原ありし
られハ小田の三郎四郎後ハ先手まて小豆坂へあり給ひ
る所まてたる合をしてたらいにせうてん志なり志なり
とは申ともも互にたゝかと立く刈合戦して初く志し

殺くハ戦なりか三郎四郎後打まけさせ給ひて盗人木
まて打き給ふ盗人木まハ深正忠のたゝの立られハそれ
よりきり切りて又大豆坂のもとおしまたまりも退返
さまて其時の合戦ハ度々とハ申せども弾正の忠のうちハ
二度退陣され申人も多くたまたれハ殺河原の如ちと云
さより殺河原ハ岩川へ引入き深正忠ハ上和田へ引入さより
あ祥ひさてあ祥まハ金井の小田三郎四郎との戦ハ
ひて深正の忠ハ清ちへ引入給ふ三河まて大豆坂の合戦
と申候へしハ志の事まてあり廣忠ハ三年廿三まて清
病死ニ成られハ長孫一殺河より入番を入く拘なり扨又
本城の御番ハ誰まてありしまた大久保新八郎と云扨二
丸ハ誰の御番まてましまたやと云田中彦四郎まて住ハ

柳形八郎安左也御代の御忠節と申 又いかやうに若気ゟし
く御年寄中上君の御事もひろく申ならハ御普代の
衆ハ年とりて見に今てかつえ死にいたし申とも御申候
ん易思召さこの君御意恐の御為ハ御手厚く成ならせら
れるともかつえ難しハ成らず御為の為のよく末代御
代々ハ必ずも何らん御手もひろかりて有ハ新参者の
衆多くも其の子孫ニ至てハしらく御年寄中成らハされ衆
御為ならく候はいる事へし それのことなく候別儀別ん
の末の子孫ともか様御年寄申して如斯に入御膝元近く
御年寄申へし 又信長より此方も成被成度こと定めく
りとも依て親ともとちとちおかれさせて御代々御忠節
申たる子孫なれともはめしつかはるゝと申て不奉公

と心申ハ無之し 右時普代もい様御さしてなびかされ
申無之し 御普代久参者ハちりくに成たる事ちるか
らの節ハ一人もなくして普代もい様御さして行へも
不のものと普代く御為るへし 御代も必ず有様候をも
御代ゟに入不申とも 又いつも御代も下されとめ候
申申にはあとの御代にも御手廻のひろき御代に
無之 又ふ様りと御手のせともし御代も気遣つる様
各も御知行成御手のひろさ御代にハ入申間敷なれ
とも又末代代に御手のちはくなる御代には前々の
御代御思ひもなく逃るゝ様候て後にハ御普代の
者の節も御知有まし 又ハ普代の衆も御普代の衆
ニ成知らすしられハ御為にあらて 以之申事のあるまし

それはこゝ代よあるゝ所を給ふ御主をいとゆしく御く唯今
の御主廣忠は御志ひの御くおもしまゝ御心易かれ
此志の御代よりは御ふ御しいふ成ゆゑ也田中
彦次郎ハ新八よのむ成唯今の御志ひハ中世ゝる
ゆれ給のことく末の御代に御志のひなれ御代もお朱給ふ
ことも下有ハ彦様の御代もお朱さ分給ひ御代ゝ久敷
筋ハちりくに成ゝ御主も御普代のそちを御称知ま
ゆゑハまさきもんなり又御普代の所も御普代の御主成
称知ゆゑハ是ともまさきもんなり志りまハ三御代まで信光
よりは此方御代ゝの忠義太かりハ成ゝ御ゝ門えなるの
すまして

寛永弐年乙丑七月十八日

平ともあれを能嘗て日一度つゝれおして御主様へ
御家御ゝなく御ゝ中ゝ御普代所ハ向後是成と
所そ御中諸のためくりハ同前之此出物くらいにおゆ
成らハいゝ御まも御普代所の事とも能きんさくして
下書らむの書物いくらひへ出御事なくしてなんし
ともかきかゝらよ可るへくらへハ各の事とハ不書して
秋一類の事又秋ことなかり書面事なまいいゝ家ゝ
門外不出下有成以上

小豆坂の合戦明年七川原より廿川ちやう藤を名代
少しして治河を江参河三ヶ国の人数催して押て西三
河安祥の城には織田三良五郎殿稱ら勢給ひてなほし
まはなく四方より責よ勢て加藤きひこ紙字地四方より
矢鉄炮紙なりして天地紙ひらう勢時とあけ三川きて
かひたくせいろ城あるやうに藤紙あけ竹きはと付畫歌
の間もゆさんなくあ藤てといれ仰へく歌いれはきや二三の
ゆる紙責紙本丸をかりよなりく扱紙うけくさの丸へ
なりしく刈あらうき紙ゆひ押こめて此内のとりあしろ
の字ちの魚紙とくまして書それよりして織田深正
中廿川ちやう藤とりや中法をしたるは三良五郎殿
とくさのまるへおひれつして刈あらう紙をゆひて押

紀殿へハ西方斗極楽ハあると斗おもふうあ殿さもせし
や何きの極楽とき殿りんやとて南まむさて脇を切る
絵ゐ家よ大河内とゝ申者ハ三法さひく御前へも来り
用をもきしまして此事云ふり殿いたし者る者や城よりも
何時きゝしくもあるとも沙らハ石川伯耆守貴口の前よ
石ふろのありける中よいりて居と信られハ御宗のことく
大河内ハ石風呂の中よりて居ける殿命殿御ゆきすれ
そ殿のことな殿そ物をこ下にて送り国へ御返しこれ能
何さりや大河内もあしくあるうや原見石もひとり時
一家よ言て神の城をは一家よ知るとは申物とも四まあ
これ殿を此人よ能あり者ハ三道のめくみよよ
りてたちまち打死殿すれ殿命をもけるる御やう

せうの御時能くあるうや申な殿ハ此度命ハ難なくたす
うる面目を四まあひ殿をこゝ御ゐるよりて打死の場
まて生捕らき服殿切きる儀ハ志うれ事云なかる
よのきたひとゝ三角のきめにはめひまくこ是殿なるよ
御見ても唯人ハ志ひの心殿本として人をあしくする
事なりれ去程ハ御七歳より御十九を殿府よ引御め
殿れ御ひて三角ハ御ふ地をこ斗のあてうひまて三河の
者成まて少も御ゐるれ仕事事殿をして今川殿ハ右殿
押候しく御舊代の前ハ十ヶ年餘御ふちかくの御あて
うひ三成様もあ殿されハ勢めて山中式千石余殿を
渡して人殿さりかく舊代の者とりう儀死よりひていい
なれハかれらよをもて少の扶持方をもくまを御ゐれとも

山中一二千程のきへ渡し此ハ孫々何れも御譜代衆ハ手作
致して年貢夫なとも致さずして百姓同前に遣くれ候
より女子共ハ後にあしく見男とも是をけあやしまぬやうに致して
城に駿河衆と云へハ氣をつかひつゝ見られとも是を末々候
あしくあつかひ事も叢いかにとも致さしぬ君の
御大事に成りやさんと相もひてされのことかりよ各
其譜代衆あつたにあたまを致さぬさはりに致して堪忍くり
給ふ年に余年にハ両度上駿苑駿河より出まりしの
事とも給ひて有竹千代様の御事に先々当座をも引ん越
なれとも竹千代様ハ駿河に召置かれハ難儀御事
として御さ候ひけん致さんとハ思へとも絶え候はゞ今川
くよにはなりとも譜代の御主様へ御本なされハ各家も

くらかね程もなく先かけ致して親殿討死致し候所西の殿御死
させ候又ハいかにと致し候て御子孫も見るにも我等まで候
かうむりまゐらせ候へハ相守るより働かれハ相かはらせ候
書あつかひしも心ざし候共しばしと申して働かは力弱きとも
末竹千代様の御為へハ我もと致さぬことはなかりしによりと各
身にあひかはりて申しおかる今川殿も竹千代様の者共
さへ静かにあつけおかるゝ竹千代様の御為へハいまだ御ましまさねとや
宮かしこに罷在候けれ共ハいかにとも悉く其人数の人数も持たせ
今川殿より取りやの城殿君よりさとまかせんに伊賀衆と候
よひてたてこもり水野藤九郎とのいくさんにはかまさに取立に
城の内よりひいらぎ致し人をもあいして年寄する者ども
人かやう成者共あつて申しこのゆへる者又外年寄

義元ハ駿河遠江三河ヘ三ケ国の人数を催して駿河を
打立先日ハ藤枝ヘ御陣を先手の衆ハ嶋田から出坂
懸川ニ着陣有れハ藤枝を立懸河ニ陣を先手ハ天河へ
引くさ井ニ陣を池田ニ着陣有れハ懸川を立てひくま
ニ諸勢ハ本坂と今きれ坂手ニまけ掛りいて五位ニ
坂より出合也義元ハ引まを立て吉田ニ先手ハ下地
小坂井国府五井赤坂ニ陣を取吉田を立て岡崎ニ
陣く諸勢ハ矢はきを打て村井田八橋ちりうまで
陣とり給けれハ義元ちりうニ陣取給ふ此以前より
沓懸ある大高城ハ前ヽより敵れハ沓懸の城
まは駿河衆入番ありありとの城をは岡部五郎兵衛に
大高ニハ鵜殿長助ニ番手に居たり信長より大高ニハ

ちかき丸根と申す山の丸根ニ佐久間大学ニ守らせてありけ
をして居たりける所ニ五月十九日ニ義元ハちりうより
たんくに押て大高へ行わしつ山の砦ハ諸くしたを
ゆんくんして諸大名ニ打寄て良久評定ありて丸根
砦を責らへき儀なれハ元康責給へと有けれハ諸卒
なり佐久間大学切て出けるか思はしからす打死
されておちう行家子郎等もいりにくく久打死て
其時松平善四郎殿かたハ又藏ニ打死ありてより
其外大高の城ニハ兵粮米多をめてまいりて入させ
定乃有けり其内信長ハ清洲より人数をくり出し給ふ
ひやうちやうにハ鵜殿長助殿もまいりての書状さしてん
ありけれハ殿様りより松平殿をかれらの思ひしと云内よ召ハ

給ひし處にさゝやかくの雨ふりかゝる所へ永禄三年か
のへ申五月十九日に信長三千をかりて三河へかけ出し
給へともあまりにくらひしかれハ義元ハ毛利新
助方場も内に服部か打取其外にも検人に梶川
なりへく打死なりしに其外ハ敗軍して
徳押後め給へハ駿河まて引給ひつゝもし信長ハ敗
軍としてハ清洲にみな引さかり給ひさる命なれハこれより
清洲へ引取れ給ふとも元康も三河にこもりは城を
らはうほの事あらんしほ大高の城乃番手ハ先中村
原にてありし義元乃弟岡部五郎兵衛ハ義元
打死に成それより川うけの入る所行きてあしと事を
城ともちかへて立松信長は引請てく一騎せぬあわて

まいしてかゝさんしても城をあけ渡し信長に義
元の首をうけて所中請取河への御供仕ったり給ひ城を
去申て首をかゝるかりの内に居中て頼む事をくひたく
お死にも申置しかくし此五郎兵衛か昔より事を存くる
作る所ハ武邊と云侍の事こそ云大国ハ大本朝ニハ
有るし尾張の國より東に於て岡部五郎兵衛か
あつかう其のなき大将への名おりそ侍それハ五ましくて
戌の体合論人にかひてあめ姫若にしく物又義元に打抜
ら城に中取る主従にあへてハ家康甲斐御川ともに
頼ひてはむとや中にかれハ元康の御ハ也ましてハ義元か
死にてても主従何方より志のある事にそやか
らほるよ城をあらくての死後又主従ハ後のに有

御陣ハ二度義元ニ面をむかハせ候まじやとて衆人のま
らひ草ニ成申さハ命をかへても其せんをかし給を
何方なりとも志かし申され度存知候間ハ御籠のうれ
ましく候とて岡崎へ御帰ハ小川より水野四郎太郎
方より浅井六之助ヲ使ニおさされ其元ハ御供申
申されは義元ハ打死なれハ明日は信長もさて押寄
可申候此の由申遣して候早々引かるへき旨候へ共
さようなりて案内者にて申越さ候ハ六之助の使ニ
本よりて申上候は我おとく御案内者申きゃく清信申
引信長押寄候へハ忠六(?)衆はいんと四郎左衛門ニ申越候
我等ニ三百貫下され清信申さんと知行とらせ御
案内者申候 水野四郎左衛門殿ハ腹を切て小くら(?)

御陣のせいをつひ岡崎家ニて給り申されかれども駿河方より
事なれハ是ハひまなくす大高の城をひのかれ給ひて
岡崎ニは未駿河衆かこもりて有けるか夜をしての
ほりかり申候とも氏さねより志川にのこし御まちあひ
ママて清ら陣を給ハねハ是非なく大寺へ御越なされ候ハ
駿河衆岡崎の城をあけてのき給ハれハ其時を以て城か
殿ハひろいんと御城へ移らせ給ふ其時御普代衆
悦御もなく同岡崎御本丸ニ拾年余御普代の御主
城をおくりよせられ一度岡崎へ入させられ候とてめでたく
御目の前にて申事ニ候とかくおもしろき事のやう
ならひやうにてさまし候らひかくさまにひとつも
一度ハ岐阜へ入申させ給はゞ御年六歳の時

此城ハ近出ニ成永禄三年うちへ中六月廿二日少年
拾九歳の時年入ニ勢給ふ事目出度うれとて悦事
かきりなし御ノ弓強河にて御手きれ城ニ成元康ハ
うへ出ニ勢羅出て家康ニ為ニ勢ふ也給ふ相又板倉
彈正ハ城中鴨江松平主殿助殿ニ三ヶ所ひきいら
殺らへとて三ヶ所ニ為ニ打ニ出し給へハ岡之城へ
来りて是ニ城ハ云つ所ニ岡崎より押寄て責ハ
し給へハ板倉彈正ハ東之河へ切ニ岡崎よりも方ニ
ニ手きら加ひりあり時ハ廣瀬乃城ニ働ニ成押ニ
めてかまへきまはて大事ニ成せりあひ相川ニ出て
居ふり数多打ニ給ふ又有時ハ川うけの城へ押
寄て町ハ城やまりなりしてして川給ふ有時ハ小河へ

御働ありけれハ小河よりも石ヶ瀬まて口をきり合ニ時
鳥居四郎左衛門大原左衛門矢田作十郎八屋半ニ射
大久保七郎右衛門日ハ右衛門高木九助是ニ於ニ城ハ合せり
三ヶ所ニ川の記給ふ又有時ハ寺邊の城ニ働ニ成押ニ
城ハ城ニ寺邊給ふ又有時ハかりやへ御働ありかりやへハ
拾八町ハ云て戦ひり十八町まて大久保五郎右衛門同
七度大賀門石川新九郎杉浦八十郎ニ合組杉浦八
十郎ハ打死ハ城ニ志てり三ヶ所たうひ川のく又有時ハ
長沢へ口働ニ成とやかれの城へ押うけあ給へとあて
給ふ三時榊原深平多清の助ハ城あれハ進そもやし
とら給ひれハ榊原滿平兵衛之助あて口を中ハ
もやくおしこみてありし所ハもやこ助ニ御事よせら

行ひなりにより、椰原早之助とも也、又有時、和尾の城へ
江働に成、是まゝ各地ゟ合、又有時ハ東祥の城へ清
働に成、各地ゟ合之、又有時ハ鹿の城へ押寄、各地ゟ合
越前の柴田と大久保次郎、十六之時地ゟ合、又有時ハ
小河へ御働に成、小川鹿又石ゟ瀬之いて、各地ゟ合、石川
伯耆守と高木主水ゟ地ゟ合、此城へ成ゝ事て、二三年ハ
御ゟ勢を出し、安藤月の内にハ五度三度宛御御ゟ御働
あ川て、其後信長と出ゟ事なん成より此城へ御働いなし
但和尾の城と東祥の城ハ後河方なれハ切ゝ御働之
きゝ居もそうつゝやうなし、此程ハ清廉の御ためにハ
とむまるれハ家廉の御ためにハ大もむこなるにより後
河へ下り屋ゟ村に至りて、金平人義あさうに義さう

なり和尾の城に至給ひし城、東祥の城へ義あさ程城
御しなひて西尾の城へハ牛久保の牧新次郎を留守居に
中付て至御堂に松平主水之助ハ中嶋の城に東祥に
むかゝ勢給ひて、おもしまして日こ相ゝ始ゟ合ゟ勢を出
隣城へ御ゟ東祥より中嶋へ働ゟるに、主水助
とのあまりてさ法く付給へハ歌方ニ川て居して、えたまれ
法志なり、慶主水助殿打死し給ふ、主城さおひまして歌ハ
川のく御ゟ又高川殿ハ義あさうへ逆心ゟして家廉の御
手紙とりさかい雅楽助城、菩川へ引入て和尾の城と日こ
相ゝ責あひなれ、牧新次郎も出ゟして城城後牛
久保へ行ゟより和尾の城にハ酒井雅楽助を至給ふ、東
祥の城へ押寄、五て城をなひて小牧ゟ出をハ本多豊後守ゟ

持かせ塚の所ハ城ハ岡原三九郎ゟ三ち佐田の所て城ハ松
升左衛門持本田其後てゝ故波なりてゝ九月十二日ゟ
ちあし紀責あひ有て義あ紀ゟ結ゟ如ゟ分の留れ事郎
城打紀ゟ味方ハ大久保太郎八郎鳥井半六郎ゟ打
紀城ゟ義あ紀ゟも半五郎ハ城ゟ三ち勢紀ひてゝ有ゟ
をして始ゟ如うさんして城ハ城なりさせ給ふ法持方にて
打ましまゝ半五郎三年廿五ゟ成ゟれとも武邊の者な
れハ敵味方たゝ中ゟ有はゝ事なり打死の上落城ゟ有ゟまし
ゟ中ゟ勢しハ年ゟもたゝ紀して半五郎ハ如く中ゟれ給ふハ
手ゟ難之ゟ深めゝり漸志ゟる處永祿五年ゟ三つの人
大の年聖ゟの方内ゟ居者ハ生ゟ法ゟて酒井雅楽助押
こゝてたんせんせんせんしゟる永祿六年癸亥正月日各せん

ゟ成ゟ寄合せゝ方ゟ御野寺さゝ紀ゟこゝりて以ゟ法ゟ城
如こして御敵ゟ有ゟ三時豊騎の成義あ紀ゟ雅城せゝめ
て主ゟ分さんゟ云ゟ程ハ甚ゟのりやうて歌ゟりゝ東禅の
城へゝひあうり手紀もさ勢給ふ葛川殿ゟ御しめに法味方
ゟ御ゝ時家康法妹ひこゝゟ成ゟれ中ゟ此度きやくさんの
ゟ成義あさ雅ゟ一所ゟ成給ふそれのゝ勢雅ゟ樋井の
松平監物殿も葛川殿も三位合原川さんせ成ゟり上
野ゟて酒井監物殿へ法さんなり東参河ハ毛沢と五位
右坂さ川て東ハ不獨後河方ゟ上坂の方ハ竹谷の松平
玄蕃殿方ハ原の松平紀伊守殿も御ちう勢川ゟ去年主
殿助殿是ハゝゝ方ゟ御ゟ東三河ゟ西三人ハ生ゟ法ゟれ給
ひて御忠節あゝ西尾の城ゟハ酒井雅楽助有ゝ野寺

蒼川とのこと記合に本多典後守ハ五升の城に居て豊つはり
倚ハむかしくあり忠節之松平勘四郎殿も雲平右京殿も
野寺へ掘升ハむかしくて御忠節之右御一門の所同本多
典後守ハ殿に一家も逆心ハなし岡崎の南ハ三つなり倚
ハ同ハ一里ハよりしし西南にあたりて野寺さし記掘
升ハ当一里あり東ハ西沢より志くふ残 殿河まで御歓なり
一里半あり東ハ西沢より志くふ残 殿河まで御歓なり
豊つはり倚ハ一の御手先なれハ口川さ所に家ハ殿せんと
心門て能殿もふりまゐに程の所ハ下しく今ハ南處へ出
りり居る野寺なも一倚ハおもりさる事なれとも彼地ハ岡崎
よりハ遠く候へハ本人とも申紛とも岡崎の当にさし記と
掘井ハ殿面て有事なれハ是ハ両所ハ押むかしくて野寺

ハ手ハくまなり豊つはり倚さし記三ヶ寺ハ志殿ハ
事なれとも其一方の寺なれハ同心志くり此三ヶ寺ハ岡
崎をくらへハ居る手先と成ハよりて家ハ云所下しく
今豊つたり倚ハ木畏三ヶ處へ立ちとる様と云へとも
野寺ハ何事もあ羅ハあり殿無と云てきしあたり此所ハ
寺内近き所に大津半大蔵殿ハ殿しめ大塚甚左衛門ハ
立衛門同又内同善兵衛二見三大蔵中河右衛門牧右衛
ハ所石川ハ手倚とし其外こゝ王の所百騎余も可有ハ
小侍ハ数殿志くに志るすまにおよそ御とのあらはへ入
とて居候ハ木乃寺内立こゝも当所念地平左衛門小谷甚左
衛門大田酒右衛門安藤金助山田八郎右衛門藤右衛門大田
苔右衛門大田彦右衛門安藤次衛門加藤彦之助大田作十郎

戸田三郎左衛門　是外思ふよおもひよらぬ寝覚ハの事なれ百騎あまり
ニ外小侍ともはかりん等し戸田三郎左衛門御家来ともひき
従西月たるよりいりて寺内へ入たる事なれとも心の底の
面川ありあらされハ寺内ひたひ入しとちかき坂とも
處にあふれなれともハ外のくるしひ援くいて　其時江家の
先ミて広めて作く末ハ松平三左衛門城へ押寄て走らすふ御ら
勢ひハ後へ出す国府へ道一里あり　其方に陣とりの
前てよ罷ありにそひ勢ひふ是ハやさしき所の西国東六衆
の江中より及同次郎左衛門　戸田城を持てあるうちの松平
主殿ニ助取しと合く居ちりたる此主殿との押寄かけて
城やぶりへハ及同次郎左衛門かけてきたりて荒屋へ出ちたこ
まりてあらなよ　松平主殿助取へ与仕をたりハ次郎左衛門

うまへ城やぶる時給ふ事なり〳〵　然ル又及同次郎左衛門
存しらす坂門とふくみ事かたりかしこに存つまとも
さやうよせらてあなておの内ならなよなし給へいこう給ふ
も国家より入いたさけ事をあへや任らきくへとも主殿助及大
きにいたさ給ひて御諚申さひやはいつあとたい
居る及城へいかの事さひふかくれとしてたさけ小さいさり
とは取れさう事なれともと御意なれハ異形よ及ひさう
面川よりちるおそらく物城し浅海ありふゆかされ
家内とおあり及同城一御事ともかとたりふるわれと右なれ
しくる掛又松平七郎殿ハ大草乃城にてさありて一騎と
一身して御諚よまかり給へハ是城ちかやさむ国家ふしひ
むきさ城へ成されハいりて行きとあらくあるうちかく

して七郎殿はおとしいたへまゐり 拙文どのよたてこもるゝ所
大橋侍市 石川半三郎 澤瀬甚三郎 同甚五郎 大見藤六郎
石川善五左衛門 同源左衛門 次瀬[illegible]の助 大橋左馬助 江原
源三郎 本多甚七郎 石川十郎左衛門 同新九郎 同新七郎
同七郎八郎 同右門八郎 同又十郎 佐野与八郎 江原又助
内藤酒十郎 山本才義 松平半助 尾野新平 村井源四郎
山本小次郎 [illegible] 佐六助 黒柳次郎三郎 成瀬新義
岩堀忠七郎 本多九郎 三浦平三郎 山本四平 浅見[illegible]水
同金七郎 加藤小五郎 平井甚五郎 忍相彦助 [illegible]
おとゝ姓ぬ兵士 七八拾騎まりる 三外小侍ハ百余一首ハ拙文
上野酒井将監 [illegible] 右馬助 [illegible]
[illegible]木九助 [illegible] 酒一郎 [illegible] 山小三郎 鳥井金五郎 本多

酒八郎 榊原七郎左衛門 大原左衛門 [illegible]数侍[illegible]郎 酒井
作右衛門 其外是[illegible]ぬ所数多あり 拙文[illegible]
寺内へたちまりる所 八屋半三郎 [illegible]助 [illegible]
同八左衛門 同八[illegible]郎 同八[illegible]郎 同平六郎 同半蔵 同半十
郎 同[illegible]大衛門 久世四郎 浅井若三郎 同小右 同五[illegible]
[illegible]ゆり 源七郎 今藤新一郎 忍柳源左衛門 同金七郎 本多
[illegible]義 加藤[illegible]義 浅岡新十郎 加藤次郎左衛門 佐野小左衛
加茂源次郎 浅[illegible]新八郎 大塚七義 加茂傳十郎 同源蔵
同市三郎 成瀬新三郎 坂[illegible] 又六郎 同同蔵 同[illegible]助
同相之助 坂[illegible]酒之厨 同又三郎 此外是[illegible]ぬ所 七八
拾騎[illegible] 共外小侍[illegible] 数多あり 上和田[illegible] 晝夜戦之
拙文御味方之所 酒井雅[illegible]助 酒井左衛門厨 石川日向守

石川伯耆与門数三左衛門 同喜一郎 本多肥後守本多平八
本田豊後守上村出羽与同左衛門 同十内是ハ此時打死鵜
殿十郎三郎 是も同時打死 松平滿太郎 数杢平滿九郎
及松平次郎太郎 及 松平金助及是も同時打死 鳥井
又五郎 鳥井伊賀守加数ひ稲の尉加数九郎 次同源四郎
米本津数三同小左衛 小栗左六郎 同滿五郎 上野三郎四郎
あ[illegible]七郎押うも及 中根数郎 同源六中根喜郎成瀬数
郎 榊原摂津守 榊原甲之助 榊原小兵衛 山田清七郎
山田そぶ太郎 伊奈市左衛門 松平左近香村半七郎 中根
ひの同源左中根甚左郎 同新左衛門 同滿太郎 中根喜之
天野三郎左衛門 同三左衛門 同甚四郎 同助左衛門 同清兵衛
同傳太郎 同又左郎 山田平重郎 荒田七九郎 あ[illegible]

左衛加藤橋麿 平岩七之助 青山喜左衛 今村喜兵衛
七ヶ新太郎 青山中之助 今藤弓左衛門 青山善四郎
平岩五左衛門 河角分之助 河上十左衛門 くめ新四郎 八国
孫九郎 石川ち数三郎 酒井下総細井喜八郎 大竹源
太郎 小栗助左衛門 仁太郎 あ藤九助 池野右之の助
池野水の助 吉野助左衛門 遠山平左 鳥井鶴之助 鳥井
す一郎 筒井と大衛門 加当ひ当書同牛之助 土屋勘助
打死 土屋甚七郎 林数六郎 同藤甚六左衛門 同四郎左衛門
松山山城 松浦数次郎 山田元八郎 此外岡崎にある所
数多有御先手へ切り所 上和田にハ大久保一郎にあり
たりさ[illegible]ふ 大久保五郎左衛門 同甚四郎 同新八郎
同滿三郎 同新七郎 同滿八郎 同甚七郎 同三助 同喜六

御同與一郎　同新義同七郎　同九八郎　宇川のかけ
三郎　伯井甚六郎　松浦八郎　五郎　同浦七郎　松山久内
雲山市内　市川半三郎　田中喜次郎　扨又土井ハ本多
豊後ありて清忠節ゟ扨又ふかうけハ松平主水助
後行のやまハ雲平玄蕃とのかたの原ハ松平紀伊守殿
異三ヶ處相なく往ひて此忠節ありやと紀河の殿ハ
藤井の松平勘四郎殿ハ川うまにハ松平右京殿南部
おもまれひて御忠節あり佐々木ハ松平三藏殿清
うきひ城ゟ請て御忠節あり扨又清たりハ小栗
助之請同仁太郎　小栗左六ハ其外小栗ありて此忠節
あり扨又岡崎ハ女町とかり上和田へあり小ちよ
ゟも上和田へ女町斗あり扨又たりくきより上和田へハ

十二三町とかりの道ハ有家ハ上和田城大久保一るいの
者ともかあ川まり日頼豊池の所ハ紀殿て終ハそれより
岡崎へ御歌城あ事なる事なし大田藤より上和田へ
働なれハやく程ハあたりて竹の筒のうへ城ゟれハ岡
崎ハ上和田ハ貝ヶ吉川さけとゝ任て書城付ゟれハ
もりや上和田ハ貝ヶ吉川さけとゝ任て書城付ゟれハ
早御馬ハ鞍城ゟて引出ハ早ゟて何時も人さ紀ハ
かゝ付けさ勢給ふ事ハ其やのあとてありくましてのく
あにとゝ町捨町のことなれハ上様現見うけゟ三徳寺
内へ引入又主ゟのかけあひゟも何成のことく貝城ゟれハ
御うあ法ゟも何そのことくようけ付給ふ三時法ゟ　うあ
法ゟたる所ハ上野庄屋　黒田半ハ歌方ハ八屋半之尉

上野庄馬 徒を合渡還源親なし徒り合ひ時思面紙渡
急源親り徒紀をと此紀なるよう事徒を重りて
八屋も深りもひきぬいてありしくよ志くのく八屋ハ浮そ
なるそへおりての紀なり家ハ水野若干郎殿うち事付紀
ひて半三厨ハ八まん大ほさ川のあまし紀ようへ紀と徒
なれハ八屋立とくありて小川ことに紀ひて若干郎殿ら
我およいとても成ら紀ハ徒紀まし紀とて徒紀ハ川をくに徒き
たてくく手ハ徒と紀我つまてゆくに稲紀ひく若干郎殿
言て紀なりハ出てもやりまし紀者紀と徒なれハ八屋云とても
志こうふふまてかくりなれハ若干郎殿ヨきへひ紀紀給ふ
半三厨の志りてさやうにそ旦ひきれ紀およ事ら紀た
まちんと云ての志りて半三厨とやハせいりしたりよ志て力

の徒よなれハ白かしの言柄紙中ふとくよう紀て生長のミ
姑四寸たりか成紙也紀あるよしてかミ紙ふきかまて
さ川くとおり志りもめて持紀の言柄も持紀も分なり
ともはひのう紀をる事ハ云事半三厨ら徒先まハ
徒らむうまんとひとりこと紙そ云なり者之紀の言半三厨と
其より野へあうりのくなる上殿らけ徒をき紀られて八屋
ゆよう紀と云徒なれハ心浮なりとて尤して見てあまハ
上殿ゆてありなれハ也川てかとし徒紙ひさ徒りて離
紙なるまておくしさんなりよふあり紀なる松平金助
よのせうあ付て八幡半三厨うへ紀と徒なれハ三川て尤
して殿様なれハこそまけをれ御勇立ようとてかく金
助よのも八屋もたりひよ鑓紙徒き合五度六度合給ふ

同ハいゝたゞ者の命ハもらはれやうにと申御扶持をうけたゞへ
申されハ大久保ぢやうぢんゆ上ありはおいなとも法ゆさ給へ
百ぜしゆ畫訳の戦まなく仕ハあまりけさへ正月十日ハ也あ
たりけさ野寺三十所のいつき方一手ハ此成上和田へ働ある
處ハ一類とも結ぶ事ハ世きたゞうひ申ハ付て三内せられ新
八郎ハまなこいらまおいの新十郎も中なこいまと其外のおい
子たゞ何成手ハ成さる者一人もなくして家ハ成たんとゝ志ゝる所
上様御志し世ハやくかゝ付さ所ハ成れハ付て敵方御
うゝ成見付申ハ付て成先ハ此あの紀なるにより
一類とも理運仕其時血池ハ成ながしたるは上様御説成
ゝ時おいなかもしんろうふんゝ四百ハいつ紀のくるゝて乃者
命ハ成ゝ下ゝへ此いゝ川さ成さへ御扶持ハ成て此ハ紀

立給ふ物なれハ上野にある酒井監物ハやうてふゝ法ふ
さ所給ふ面さいりふ況やさゝ成も松平監物ハも蒙
川成も其日ハ押法ふし給ふ面さ何らの御世んもお
ちて一時れ給ひて何とら成とも面こう望ハ筆まら成て先
御扶持ハさせ給へ御手さへ廣くなれ筆給ひて其時ハ何と
ら成ゝいんも御便ハ一ゝら成ゝのと思今何うとゝ給ふ事あれ
ちとゆ上あれハさ所ハちやうなん筆ハゆるしむさ所う
かゝへし此て上和田のちやうしゆいんハ御出ハ成て法せう
成あそうして右ゝ者ハこゝ下ハ給ハ是ハ成いゝ紀所ハ成て
石川日向守おとゝの寺内へ高次の江より八町へ引入なれハ
一騎方の名おとゝ紀さゝあるとも早先入あれハかなりす
して我もくゝと手ハ成合なれハ御也るにあるて方ゝへ

しなる程に八屋半之尉かうつめに打ちとられ、そこ
なれハ引の程にて生ゆて死なるを正治と云名ハ皆いし程不
ゆて追法なりて其ておひ成打と云なれハ立帰りて八幡
大井手なひまてハかしせうぬくの陳場そと云なるに
よりてはらハ正治になれとて其寿河井正徳と申之
いまのうに世にかゝる成物成ハきらうと見へけるか當
世のうゝる者ハ志雅也昔ハかゝる者成ハきらうにさるに
よりて正法かやうなるものもあり給ふ事に半之尉取
打死志給ふと母のうゝへ法なり来りなれハいそ程母を
ちゆて何と半之尉ハ打死と云かしこゆりてはさひこハ
いゝあり給ふそひ類なるさそハ心安物うれうれ若半
之尉ハそ最後恐ぬとさくなる程ハ我も命なる程へきん

もあるましなれ宮様のよ程とさくて嬉しさよ此中打
死ハ侍のやくなきハ驚てくやむに家度と云女にハ御
子事さすら半之尉の母なり此云給ふ家にも當田成
没して行長忠の法くてたゝ祐もかうさんして其仕給ふ
相又ゆいのたち田信玄と仰合家康ハ遠江成河さりに
取給へ我ハ駿河成さりに居ん此ゝ信合当国へいて
給ふ菅沼次郎蔵鈴木石見守今夜是之人常内者を
して永録十一年法ちのへたり十月日遠江もさせ給ふ法
室に氏さ祐ハ信玄に駿河成也法れなひて然川落来
給ふ上様ハいのやへ出さ努なへハ久野ゆゝまた早御手成
取小笠原彰九郎成めしてまた方一類の事なれハまむ
し塚へ行て小笠原大八郎成門付給へと御説に付て

それより海むし塚へ切ける處にて八郎ハ人志ち城ハ流れて
秋山所へ行城道まてあひて御勇いたらうとよりいたら
くへ通ハ雑勢給ふと云へハ新九郎中ハ我ハ御勇の方へ
心ら事ありハ御勇大勢引ハ流れ何方へ出ると雑を給そ
我ハ秋山方へ出仕城いたらして人志ち城深し一事と思ひて
是ゆて雑出中せ中勢は王儀ゆ雑ハ先御帰あれ内諸
城中さんとて糾押返し中南国ハ家康の御手に入なり
御勇ハ秋山方へ出仕ハやめ一雑まて家康御付されたるため
にそれらしら来ると中ハれハ何と成た事度乃御たら
雑ひ悪事ハあ雑しとて秋山へのお仕をやうて屈めて
新九郎城ハ流れて家康へ出仕あり上様ハ鶴川へむう
ゆ勢給ひて以り山をに御陳城を雑勢給ふ秋山ハ信

濃より遠江の国あるこへおて見ハ事のこうに陳の所て
国侍引付中寸笠城ハ有る絶望に家康より任ハ
ける大井河城ハ引て強河ゆ内城ハ信玄の所分大井川
城ハ引て遠江の内をハそれらし領分と相定有望に
秋山らせてこと申されなし事ゆ引へ雑を給へと御使
立有られハ畏ハとて山なし一引入せくに高原へ押あ
事て原の谷城せらおりくと也さい江城おりて内よの山へ
出て強河へ行秋山ハ吳儀に及ちの事雑ハ打敷ら成んと
ら行られた秋山吳儀に及ちたして引の所なるは秋山
ゆ志やせこそ中ハり絶望形様十一年つちのへ辰の
とし氏さ様ハ強河城ハ信玄に返す雑ハせて鶴川朝安
備中守へ蔵来り給ふ備中引請て家城せんとかり

へものうすまし也申定なるやうに作法と古局十番の為
人内諸して申なるはいかに況そうもうとも又ハ主なれハ
かゝらくをりていたに知りて紙に知れたるやもしく勇紙をかゝるとも
腹紙ハきゝ産をられ万数として為人かくゝ帰りて此世中に
れハ二部左衛門鶴さ主紙なるハ法うをひ紙下申とて
此世中上なれハ右と紙とて紙ハ御うせいの紙指をし給へハ
二部左衛門ハ二の丸へおりて本城へ御うをいの所物也ハ
近ゆくいなる主景然川へ押よ分て天王山に御旗紙
立給へハ城よりもあるものをのかおてきひしく分り合
主法給ふに面目紙失宰人紙して氏さ給へ出法供
紙して今此城に籠居所の内に打死も有伊藤武兵清
紙松原次左衛門ハ打死大屋七十郎紙ハ大久保次左衛門打死

大屋七十郎紙ハ大久保次左衛門打死小坂新助を大手のぬ
まちかひまておひこみて切りちらへ申て打死のくさか
名の高名ハ数多あり主時雲原いんあんに申なるは
くゝ打に仕たると申上なれハ大久保次左衛門ハ申なるハいやく
今日の高名にくゝ打ハ一人もなし御勇の打たるも皆ひ
ひの具足紙さて鉄砲にあたり死あしたる紙打給ふ成
今日の高名おとくくひつむくひこ紙あり死なるも
鉄砲にあたりて死たるひへくひ申て ハ住とも申慶内藤
四郎左衛門高名紙して来りて申ハ高名ハ仕給へとも
今日姓高名ハそれうしハ紙始書くひなくひまて此陣と
申上なれハ内藤四郎左衛門と大久保次左衛門ハ口ハ相もあふ
たちり為人の所にハまやいたりと各申なり相又天王山

永出ニ久郷三郎左衛門殿ニ被相分賢ニ給ふ事ニハ加ニ田
村の上ニ永出殿ニ成各番ノ手ニ持南ニハそう山ニ永出殿
ニ成小笠原与八郎ニ持殿ニ永禄十二年ニ法ちのとの
己正月廿三日ニ落城して氏さ様ハ小田原へ落ゆり賢給
ふ之殿ニ永禄十二年ニ法ちのとの己三月日一騎のおさ
ゆ也法事来り其便ニ永あへさ賢給ニ加事付給ひて
主ニ知しなく永禄十二年ニ法ちのとの己三月日ニ賢ニ事る
祝ニ能ニ居ひニ付てのる殿ニ大久保基十郎十七歳ニて
一番家しける家ニ殿内より鉄炮ニて左の屋ニ殿おれて
打死殿する平井基四郎も打死殿する其外数多打死
あり堀川ハ志ほのさしさる時ハ来ニてより和へ行屋紀
かくもなし志ほひく時も一方口なれハ為殿もひろ手法め

いるほとニ紀男女共ニ居てきりあてきりあて志ゝりける右の大久
保基十郎ハ右ニ一騎のおこりさる折節ニ心ありて合せれハ
書くまゝ紀くの所をちも驚きさるくこれも有られハ基十
郎ハ御膝力ニちらく下法ゝれ御意のよ事れハ
一ニニ申あれゝり誰ニハおとあ紀あるてあと先へ来事
ちるニ山へ事入て申候誰ニハ示乱して神妙ニ御座
川る中ニ上あれハ志ゝ事なれとも神妙ニ終見ゝなりけり
御意ニ成きよかん也殿ニ見付のかゝ殿法志ゝ志ゝまに
成城と云原ニ各屋敷殿殿してきまを給ひけるか家
いふて殿とて演松へひろ賢ニ給ひて御城殿きし
屋へ給ひ御志ゝ志ニ定さ賢給ふ相又信長ゝ伝殿
事ハ御加勢ニ成給へ小近江ニ働殿ニ和ゝりんせら

御様へハ能々弁へ給ハんとて御出馬ニ成らる永禄
十三年カノヘ午四月日信長金ケ崎へ働給ひけるに越前
表浅井なれハ信長も大事と思ひ家康殿ニあつまりて
ひ給ひて御陣へしまハひの由江北小谷を給ひし故
浅井が方へかくして夜明て木下藤吉郎御案内者申てのか
れ給ひ給ふ金ケ崎の北口より申信長の浅井方
にハ大事の北口なり此時の藤吉ハ後の世の大
かうなり信長は北小の郡よ御働ニ成らんと思召ニ
越前衆ハ朝方ニよれ出ひより都への行き給ひんと
三万余ニて出られハ信長も急様山まて御出馬ありて
家康ニ早く御加勢ひ成らんとして越前衆后出
申て合戦ハ下ニ成ニ申ニ信長へハ相心得申してこそ

御出馬成られ信長ことの御談給ひてまつく御出馬
有此ハ明日の合戦ニ打定申一番ハ柴田あけち森佐渡
かくし申付候家康ハ二番合戦と頼入申と毛利新助
ニ為入頼候ニ信長へハ少ても御加勢申さんハ信長ニ御
ところ思召たニ一番合戦ハ下され御付候ハ信長へハ
信長の仰ニハ家康の御為ニ思召て成
様ニも申されハ信長ニハ一番ハ御あるまする
事もいらくへハ日ハ浅井方まて給ハ其故一番も二番
も同心也二番とても時ニより一番ニ成事もあり
とのたれハ荒角ニ二番ハ頼入申と仰られ有なれハ
又押返して御ハはむそるへ但ハ御定の通也一
番二番へとも信ハいくと思ひ又むかしの事申なり

一番も二番も同心しら御入候所也と被仰ける明日乃
合戦よハ二番ゟ一番ゟ一番よ成るや仕給んと候ハ時の仕合
さへハ二番ゟ一番よ成し申ても後の世までの書物
よハ一番ハ一番二さんハ二番と書のせてまいるべきも
下野守菅沼一番ニ成御請申候て候ハれけるか年も
寄たる者なれハ二番四番に成まてもなく候ゆへ一番
成れしも三十ニ下たるたるさう者か御加勢ニあけて一番
取申請候て二番所くまいり候まて申候ゆへニ候成
合ハ事ハなく候て菅沼ニ一番候ゟ仰付候へ給たんハ
明日の合戦ニハ候まじく候候を合ハせ候て候
内ゟ申し出候て有られハ信長守有て家康のゟ仰ても
被申候たる所ニ思召て酒井左衛門を候されて

一番合戦ハ頼入申しら仰ける明日の御合戦ハ家康の一番
諫成候まじき事に候てこの以前も一番諫ハ被仰付
唯今家康へ一番ハ御越候への御意候まじく候と
申上られハ信長御感被成候ふかく候たよりの
成られし候ハさん成ハ成されけるに何と成とも仰
られハ重て被仰出事 家康きハ家康の一番よ定
ならず家康の仰よハ明日廿八日の合戦よ今日廿七日ニ是
へ付て一番諫ハ請取事 天道の本意成とも仰
所所行ありけれし 永禄十三年かのへ午六月廿八日乃明
かのよ押いて候ヘハ越前衆も三万余也て互に押出たる姉川
まへ川へ責たかひ 家康よ家康の御手より言わるかし
あひ打よ打候ヘハ信長の御手ハ旗本ちかくまて言ひまて

雅書各家ヨの所ゟうゝ勝れとも家康の御前ハ加州て
おらへきり入給へハ敵も利敗軍して不殘打ハ給ひて
今日の合戦ハ家康乃御手柄故天下乃ほまれ故ゆゑ也
信長も御かん也それより有りしこ押法めさ勢給ふ事
良も近江織ハ家康中越前まてもきりと雅勢給ひんに
そう西川信長ハ加州てかゝしの緒ハ志めよせて三徳
きゝへ川入給ふおけたさ南の合戦にも義元ハ打ハ給ふ
折其より法めこゝ事押給ふ物なき雅ハ其ゝやかに三河並江
強河まて納さ勢給ひん此時も掬たさ南より きゝそへ
川入給ふ雅とも給ふハ近江も越前も三河並江強河も
御手ゟハ入たれとも勝て甲の緒ハ志めよとて天記なひ故
以法ゟ三ハ綱雅書ゟ事ゟ也御方也雅書永禄十二年

かゝへ年十二月日越前衆ハ三万余まて ひ忍ハ山ゟ陣より有
信長志かへ御陣ハ永給ひて家康ゟ御加勢の由
ら御越ゟれハ石川日向守ハ法ゟさる也岡ハ早雪
も法ゟりまる事なれハ兵粮米も盡て下雅ハ敵ハ
こゝろまへしと信長も思ひ候ひ家ハ山より ひやう
らうの三法ゟ事中のこゝ事ゟ候ハ山ゟ ちやう雅ハ
信長ハ打中さんとも山より申越なるハ越前衆の陣
屋へ火ハ給ひけ下雅ゟとさんハさ川てかゝ雅勢給ひて敗
軍一有ニ三織ゟ雅ハ松中ゟ山へあゝ雅勢給へと申ゟれた
信長さすかの弓ハなれハ志ゟ山へあゝ雅也給ひそして
坂本まて押よ勢て火の手ゟ行ゟ雅ハよ勢ゟ事ゟ也しとて
ひゝへさ勢給ひしなるゝあんのことく帰ちやう雅ゟ雅書

越前衆ハ三万余有時又近江国ハ大ゝ越前の領分なれハきふへの道もふさうり申ふへハ信長ハ日川ゟ其方の内なれハかなりしとて扱越前者さ分給ひ天下ハ朝倉殿持給へ家ホハ二度望なりしと紀請越ゟ紀給ひて世事ましてきふへ引入給ふ相又相川つ者さ川てのなり羅を給ひなり家康御加勢ニ成なり其時ハ松平勘四郎殿ハ諸家中より人越御ゝ出合付て立給ふ程なり家ハ信長ハ日ん流ゝりの城越貴さ分給ふよさゝる事ハ御を小城ハかゝりて日ハ越流くしてせんも知ハ是ハまゝ川さしむて都へさ川ての国羅ハとて城越ま紀なりして加羅めて乃衆川のく越勘四郎殿是越三給ひて大手のうゝより貴入給ふ糾ゟ羅めてへ落行ハ城へ礼入松平勘四郎殿手柄御覧ハ云ふ事及志ゟる者都へハ羅勢給へハらん程ハ小田上野殿の者と三河者ゟ出合ハ忘得し越一ツをいあいて上野殿者越三河者ゟ志ゝるかハ打なれハそれゟ者んくまゝ成りて美濃尾張の衆ゟひとつハ成て松平勘四郎殿へ少勢かくる何も三河衆ハ是非して書く町へおて弓鉄炮鑓越ゟまへて乗なる事へ少勢ゟくる程ハひ紀う者て打立なれハ内乃あくりへ少勢流ゟんこと知りひもよ羅ハして給へ此中ゟれハ信長さあしめし云語道ゟ屋ゟさる事越中者たゝ和家康より加勢越頼とて来なる勢を打勢を程のあうやく物ゟ志うし越しさるやはなら

あ羅ハ一こまをひとゝいやんと三郎ゟれハ少勢うくる者た

いぢりくまなりたるを扨又信長勘四郎殿ぬめして
信たるは勘四郎は此度こそ信たりまゐて手柄ひるいなれ
所に又此度にんくを扨くひるいなし勘四郎は暫いは
ちいさにれとも紀も大きく成者こいやく勘四郎はのし
つまぬさして有る此度の陳ぬは信たる事ぬ所紀そ
やはり仰たり勘四郎殿ためまは面目成しうる事に
信長の仰に天下の公方も越前の朝倉ぬ頼ておりし
ましたれとも朝倉もつんとりしに心ぬねさ公方ぬ引詰
中にとも有程さるぬそれにしかきなへよひ越て二度天
下の公方となりしなり中たる其情ぬも忘あまりけさへ
朝倉と一方して我まに敵ぬなる事恩ぬ志り給ひ
給ひ服ぬも紀程を中度ひ存つまた公方にておりしまゐ

ゆるしまゐしとて却ぬ拂ひ給ひたり三時にひ忘れ
山も毛袖の方にして帰ちやうきぬして我ぬ守さん
やしたる事さ程は山ぬ守にて御しにて仰あれてそ続
よりひ忘れ山はくれまたり扨又信長記ぬ見るに
川ぬりおしし三ヶ一は有度也三ヶ一はにたる事もあり
三ヶ一はあやうたちも有紀度所り信長記にたり
者ゟ我こうひいれの者ぬ我知恵の有儀に紀作り
守るやうに見へやうこそ取所にて乃勝負の事ぬ書付
たるに先例と見へまるは其法年十十一十二三に成て
西も東も志程さる者ゟ皆いたんしてたるかなに元服して
男に成て有る者物語に紀し扨ぬそんちやうそこ
にてたしりめくりひ類も有紀高名なとく書て例

紙にしたりする事もおゝし出藤なとの陣にも皆さる
高名紙合打に志ゝるとゝ云事もあり或者にしたりひな
とも一代にしたりひきる事もなれ人紙或者つかひし
きるとうれてありけし外此場ゆへの事も偽多し
度々ゝ国てひ者紙人ようしつ指紙さゝれ者る
者紙鬼神のやうにうれたるもあり又ハ云々の高名
紙して諸国にてうくれなれ御目への者紙かゝさるも
あり力のなれ者の紙大力と書々れハ之なれ偽之大力也
書なるゆへひとりちう所持する所ハ一人もなし者間く
力なくしてひうへ出成所御目さゝ多くかやうに書ロ
事ハ相人ハ紙に同紙ハ無きる所の事紙かゝるなれ変
紙も出たりなると見へきり志うる時ハ書者に知恵

ありてちへなれに似たり志りる事信出所にハ偽多し
也にしたりしなり家康御代々の事紙是にうれ志る
其いさゝかいにしたりしゝ云変ハ様のようも當代にも
御そ雅く中人ハ有事なれ志りれとも人に見ん皆ロ也
書所に其紙ハ子とりに八代九代の御立様紙されたりも
後知り皆んきめなり門外ふ事ゆゑ件

寛永二年乙丑八月廿八日

參河物語上下二冊名以愛教氏
友景本　文政十二癸丑正月下旬於府
起毫同二月廿一日於益城下郡
砥用鄉原甲邑寫之

中村直道

薫蕕錄卷之七十三

薫蕕卷之拾九終